

身近な 国際交流

二本松国際交流ボランティア

『ざくざくネット』

国際交流というと、皆さんは何を想像しますか。海外へ旅行や留学をする、外国語を勉強して外国人とコミュニケーションを取る…などと考えるとハードルが高く、難しいと感じてしまいます。しかし、実はそんな難しいことをしなくても、外国のことを知り、外国人とコミュニケーションを取ることが出来ます。市内には、外国人などに日本語を教える二本松国際交流ボランティア「ざくざくネット」という教室があります。今月号では、「ざくざくネット」を紹介しながら、身近な国際交流について探ります。



「ざくざくネット」の発足は1999年5月。たくさんの具材が入っている二本松の郷土料理「ざくざく」のように、いろいろな国の人々がそれぞれの個性を出し合って、みんなの良いものを作り上げていう、という思いから、この名前になりました。ざくざくネットでは、「先生」「生徒」という関係はなく、日本語を教わる人を「学習者」、日本語を教える人を「支援者」と位置づけ、毎週金曜日の午後7時から9時まで、二本松福祉センターで活動しています。会費は年間千円。高校生以下は半額で、支援者である日本人も会費を負担しています。テキストなどはすべて学習者が自分で購入し準備することになっています。教室内は少人数グループの個別指導で、会話はすべて日本語です。発足のきっかけは、現在ざくざくネットの代表を務める菊地紀子さんが、外国料理を作る市民講座に参加したとのことでした。料理を教え

てくれる外国人が、「日本語を勉強したい」と話したので。その当時、二本松市内には日本語教室がありませんでした。「JICA訓練所のある二本松で日本語教室がないのは寂しい。日本語教室をやるう。」と仲間と一緒に立ち上げたのです。立ち上げの際には、福島県国際交流協会や、近隣で活動していた日本語教室(当時の岩代町にも存在)、市の関係部署などのサポートを受け、少しずつ形をつくっていきました。ざくざくネットの学習者は外国人だけではなく、日本人の聴覚に障がいのある方もいます。手話の日本語と、書く日本語では文法が異なるため、学びに来るのです。日本語を学びたい人なら誰でも参加できます。年々増加している、日本に住む外国人。共に暮らしていくためのヒントを、ざくざくネットに関わる人たちから考えます。

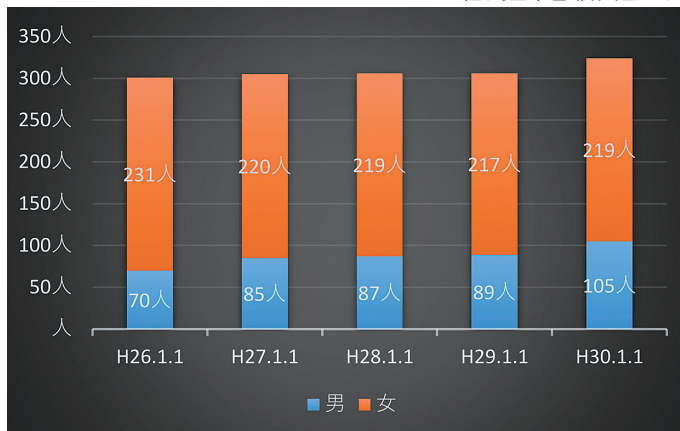


学習者・支援者の皆さん揃っての一枚。この日集まった学習者の出身地は、インドネシア、ケニア、シリア、中国、フィリピン、ブラジル、ベトナム。さらに国際交流体験で安達高校の生徒と先生も参加していました。



二本松市における外国人人口の推移

※住民基本台帳人口より



※特筆すべきは男性人口の増加で、市内に働きに来る外国人の数が増えていることを示す結果となっている。

- 1 毎回和やかな雰囲気の中、ざくざくネットの学習は進められる
- 2 黒板の『ざくざくネット』の文字は、ベトナム出身の学習者が書いたもの。最初書いた時、「ざ」の何かが足りないよ〜と支援者から指摘を受ける場面も
- 3 他の学習者と考えながら、書き直して、無事完成



interview 1

イス・マイル・ヌル・ハサンさん
(インドネシア出身)

2017年8月に来日し、市内の企業で技能実習生として働く。来日前に4カ月ほど日本語の勉強をした。現在20歳で、両親と中学1年の妹がインドネシアにいる。日本に来ることを心配していた母も、今は応援してくれている。

若 いうちにいろいろな経験を積みみたいと思って、私は、日本へ来ることを決めました。

技能実習生(※1)として、プレス機械やNC旋盤(※2)で部品を作る仕事をしています。仕事に慣れるまで苦労しましたが、1年経ち仕事にも慣れました。3交替勤務で大変ですが、毎日頑張っています。

ざくざくネットには、先輩に誘われて参加し始めました。勤務時間が不規則なのでなかなか参加できませんが、先生(支援者)はもちろん、そこで出会った方に助けられています。教室で知り合った人たちとのLINEのやりとりを通して、困ったことや分からないことを聞いています。おかげで、日本語能力試験の「N3」(3級相当)

当)に合格できました。さらに勉強を頑張つて「N2」(2級相当)を目指したいと思っています。

休みの日には、ざくざくネットのメンバーとサッカーをするなど交流しています。

将来、インドネシアに帰ったら、身に付けた日本語を活かして、通訳か不動産の仕事で起業してみたいです。

※1 技能実習制度

技能、技術または知識の開発途上国等への移転を図り、開発途上国等の経済発展を担う2人づかりに協力することを目的としている。2016年に公布された技能実習法が2017年に改正され、技能実習制度が拡充された。実習の最長期間が3年間で5年間となったほか、人数枠が倍となった。

※2 NC旋盤

円柱状の加工材料を回転させ、刃物を当てて不要部分を削り取る金属加工である旋盤のうち、複数の刃物を用いて生産効率を高めたもの。



interview 2

桑原 ヒカリさん
(ブラジル出身)

福島市出身の父と北海道出身の母の間に生まれ、学生時代までブラジルで育った。先に日本で働いていた姉に誘われ、両親が生まれ育った日本を見たいと思い来日を決め、日本で就職。来日後は群馬県で働いた後、1999年に二本松市へ。その後結婚し、中学2年の娘を育てながら働いている。

ブラジルで育ち、ポルトガル語しか話せなかったのですが、働きながら日本語を勉強しました。日本人の同僚など積極的に会話し、話すことはすぐに覚えました。しかし、

ひらがなとカタカナは独学で覚えたため、書き順が正しくなく、娘が小学校で勉強しているときに一緒に勉強して覚えました。日本語は、話し言葉と書き言葉が違うので、難しいです。特に、漢字がとても難しく、分からない漢字があるときは、周囲の文章から推測したり、娘に聞いたりしています。それでも分からないときは、ざくざくネットに持って行って教えてもらいます。日本語は難しいですが、面白いです。また、二本松に初めて来たときに、訛っていたので「日本語が違う」と思い

びっくりしました。(笑)

ざくざくネットは、娘が小学生になり、徐々に学校の勉強を教えられなくなり困って知人に相談したところ紹介され、5、6年前から参加するようになりました。今では、日本に慣れないメンバーの相談に乗ったり、遊びに出掛けたりと、交流することによって支え合っています。

日本は、とても便利で安全だと感じます。日本人の友人も増えて、ママ友との付き合いも楽しいです。料理が得意なので、ブラジル料理を振る舞うこともあり、安達高校やJICAでブラジル料理を教えたりもしました。ざくざくネットを通してたくさんの人と出会い、支え合うことができて本当に良かったです。



インドネシア出身のマイルさんらが、安達高校の先生と生徒と一緒に、仕事の話などで盛り上がる。

共に暮らしやすい
まちへ

ざくざくネットの教室をのぞいてみると、海外へ行った外国語が話せなくても、このまちにいながら国際交流ができることが分かります。外国人と会話をする際は、相手の言いいたいことを理解しようとする姿勢、コミュニケーションを取ろうとする姿勢が大切です。それは日本に住む外国人に対してだけでなく、観光で訪れた外国人にも同様のことが言えます。それが、市民レベルのおもてなしにもつながるのではないのでしょうか。



interview3

国際交流ボランティア『ぞくぞくネット』

代表 菊地 紀子さん

1999年ぞくぞくネットを立ち上げた。インドネシアの技能実習生の地域指導員として活動しながら、市内の小学校で相談員として働く。

大学を卒業後に東京で就職したのですが、「外国に行ってみたい」という思いがあり、ベトナムの日本語学校で1年間働きました。

その後二本松へ帰ってきて、社会教育指導員として働いていたときに、「市民講座終了後も活動を続けたい」という方たちが愛好会などを立ち上げるのを間近で見ていたので、ぞくぞくネットの立ち上げに迷いはありませんでした。

やさしい日本語

学習者に日本語を教える際には、やさしい日本語を使うようにしています。やさしい日本語とは、災害発生時、避難情報などが在留外国人に伝わりやすいように、阪神・淡路大震災をきっかけに考え出されたものです。具体的には、短く、やさしい単語

を選ぶこと、端的な表現をすることです。

やさしい日本語を使う最大の理由は、その方が外国人にとって理解しやすいからです。外国語というと、日本人はつい英語を考えますが、母国語が英語でない方は多く、また日本に住む外国人はある程度の日本語は理解できます。さまざまな母国語の外国人たちにとって、日本での共通言語は日本語です。やさしい日本語が使えれば、教室の外でも日本人とのコミュニケーションが取りやすくなります。

もう1つの理由は、日本語以外の外国語を使う場合、教える側の支援者が限られてしまいがちですが、やさしい日本語なら誰でも支援者になることができるからです。

子どものための支援

国際結婚で、母国から子どもを連れて来日する外国人が増えています。二本松市にはインターナショナルスクールがなく、市内の学校に転入することとなります。子どもにとって、日本語を覚えることが1つの壁である上、さらに学校の勉強を、母国語でない日本語で学ぶことは非常に大きな壁です。

そこで、ぞくぞくネットとは別団体で、小学生から高校生までを対象に、日本語と学校の勉

強を学ぶための日本語教室を毎月2回、開催しています。

身近な国際交流

以前は結婚して日本に来た中国やフィリピン出身の方が多かったのですが、最近ではベトナムやインドネシアからの技能実習生が増えています。

私たち支援者にとって、日本語を教えることは、異文化や言葉を楽しむことができる、身近な国際交流です。日本人が海外へ旅行すると、ツアー旅行などの場合は観光地しか巡らず、外国人の暮らしを見ることまではできません。しかしこの教室では、外国人と話しをすることで、外国人の暮らしや考え方を知ることができます。日本語を教える代わりに異文化を知ることができる、ギブアンドテイクの関係です。ぞくぞくネットでは、日本語を教える支援者を随時募集していますので、興味のある方はぜひ参加してみてください。

共に暮らししていくために

ぞくぞくネットの設立目的は、「日本人と外国人が、相互に生活しやすい環境づくりを行うこと」です。特別に何かをしなければいけないのではなく、普通に「接し」「話をする」ことで、外国人も日本人も、共に暮らしやすい社会になっていくのだと思います。



学習者に合わせた個別指導の様子。写真左はフィリピン出身の学習者のひらがな表とテキストで、写真右はシリア出身の学習者が漢字の学習をしている。

日本に住む外国人が年々増加している現在、行政からのお知らせや、医療機関などのさまざまな窓口で「やさしい日本語」を使うことが、外国人に分かりやすく情報を伝えることにつながります。ほんの少しの気遣いで、日本人も外国人も、誰もが暮らしやすいまちになるはずですよ。